

悟淨歎異

— 沙門悟淨の手記 —

中島  
敦

昼餉ひるげののち、師父しふが道みちばたの松まつの樹きの下したでしばらく憩いうておられる間ま、悟空ごくうは八戒はっかいを近くちかくの原はらっぱに連つ出して、変身へんしんの術じゆつの練習れんしゆをさせていた。

「やってみろ！」と悟空ごくうが言う。「竜りゆうになりたいとほんとうに思うんだ。いいか。ほんとうにだぜ。この上うなしの、突つきつめた気き持もて、そう思うんだ。ほかの雑念ざつねんはみんな棄すててだよ。いいか。本気ほんきにだぜ。この上うなしの・と、こ、とんの・本気ほんきにだぜ。」

「よし！」と八戒はっかいは眼まなこを閉しじ、印いんを結むすんだ。八戒はっかいの姿すがたが消きえ、五尺ごせきばかりの青大将あおだいしやうが現あらわれた。そばで見みていた俺おれは思おもわず吹ふ出してしまった。

「ほか！ 青大将あおだいしやうにしかなれないのか！」と悟空ごくうが叱しった。青大将あおだいしやうが消きえて八戒はっかいが現あらわれた。「だめだよ、俺おれは。まったくどうしてか

な？」と八戒は面目なげに鼻を鳴らした。

「だめだめ。てんで氣持が凝こらないんじゃないか、お前は。もう一度やってみろ。いいか。真劍に、かけ値なしの真劍になつて、竜になりたいた竜になりたいたと思うんだ。竜になりたいたという氣持だけになつて、お前というものが消えてしまえばいいんだ。」

よし、もう一度と八戒は印を結ぶ。今度は前と違つて奇怪なものが現われた。錦蛇にしきへびには違ちがいないが、小さな前肢まえあしが生えていて、大蜥蜴おおとびけのようでもある。しかし、腹部は八戒自身に似てブヨブヨ膨ふくれており、短い前肢で二、三步匍はうと、なんとも言えない無恰好ぶかつこうさである。俺はまたゲラゲラ笑えてきた。

「もういい。もういい。止めろ！」と悟空が怒鳴る。頭を搔かき搔かき八戒が現われる。

悟空。お前の竜になりたいという気持が、まだまだ突きつめていな  
いからだ。だからだめなんだ。

八戒。そんなことはない。これほど一生懸命に、竜になりたい竜に  
なりたいと思いつめているんだぜ。こんなに強く、こんなに  
ひたむきに。

悟空。お前にそれができないということが、つまり、お前の気持の  
統一がまだ成っていないということになるんだ。

八戒。そりゃひどいよ。それは結果論じゃないか。

悟空。なるほどね。結果からだけ見て原因を批判することは、けっ  
して最上のやり方じゃないさ。しかし、この世では、どうや  
らそれがいちばん実際的に確かな方法のようだぜ。今のお前  
の場合なんか、明らかにそうだからな。

悟空によれば、変化へんげの法とは次のごときものである。すなわち、あるものになりたいという氣持が、この上なく純粹に、この上なく強烈であれば、ついにはそのものになれる。なれないのは、まだその氣持がそこまで至っていないからだ。法術の修行とは、かくのごとく己かのれの氣持を純一無垢むく、かつ強烈なものに統一する法を学ぶまに在る。この修行は、かなりむずかしいものには違いないが、いったんその境に達したのちは、もはや以前のような大努力を必要とせず、ただ心をその形に置くことによつて容易に目的を達しうる。これは、他の諸芸におけると同様である。変化へんげの術が人間にできずして狐狸こりにできるのは、つまり、人間には関心すべき種々の事柄があまりに多いがゆえに精神統一が至難であるに反し、野獸は心を勞すべき多くの瑣事さじを有もたず、したがつてこの統一が容易だからである、云々うんげん。

悟空ごくうは確かに天才だ。これは疑うたがいがない。それははじめてこの猿さるを見た瞬間しゅんかんにすぐ感じ取とられたことである。初はつめ、赭あまら顔がわ・鬚ひげ面づらのその容貌ようぼうを醜みにくいと感かんじた俺おれも、次の瞬間しゅんかんには、彼の内うちから溢あふれ出るものものに圧倒あつたうされて、容貌ようぼうのことなど、すっかり忘れてしまった。今いまでは、  
ときにこの猿さるの容貌ようぼうを美うつくしい（とは言えぬまでも少なくとももりっぱだ）  
とさえ感かんじるくらいだ。その面魂つらたましいにもその言葉ことばつきにも、悟空ごくうが自みづか己みづかに対して抱かかっている信しん頼らいが、生なまき生なまきと溢あふれている。この男おとこは嘘うそのつけない男おとこだ。誰たれに対してより、まず自分おれに対して。この男おとこの中うちには常に火かが燃もえている。豊とよかな、激げきしい火かが。その火かはすぐにかたわらににいる者ものに移うつる。彼の言葉ことばを聞きいているうちに、自然しぜんにこちらも彼の信しんずるとおりに信しんじないではいられなくなってくる。彼

のかたわらに在るだけで、こちらまでが何か豊かな自信に充ちてくる。彼は火種<sup>ひだね</sup>。世界は彼のために用意された薪<sup>たきぎ</sup>。世界は彼によつて燃されるために在る。

我々にはなんの奇異もなく見える事柄も、悟空の眼から見ると、ことごとくすばらしい冒険の端緒だつたり、彼の壮烈な活動を促す<sup>うなが</sup>機縁だつたりする。もともと意味を有つた<sup>も</sup>外の世界が彼の注意を惹<sup>ひ</sup>くというよりは、むしろ、彼のほうで外の世界に一つ一つ意味を与えていくように思われる。彼の内なる火が、外の世界に空しく冷えたまま眠っている火薬に、いちいち点火していくのである。探偵の眼をもつてそれらを探し出すのではなく、詩人の心をもつて（恐ろしく荒っぽい詩人だが）彼に触れるすべてを温め<sup>あた</sup>、（ときに焦がす<sup>こ</sup>惧れ<sup>おそ</sup>もないではない。）そこから種々な思いがけない芽を出させ、実を結

ばせるのだ。だから、渠・悟空の眼にとって平凡陳腐なものは何一つない。毎日早朝に起きると決まって彼は日の出を拝み、そして、はじめてそれを見る者のような驚嘆をもつてその美に感じ入っている。心の底から、溜息をついて、讚嘆するのである。これがほとんど毎朝のことだ。松の種子から松の芽の出かかっているのを見て、なんたる不思議さよと眼を瞪るのも、この男である。

この無邪気な悟空の姿と比べて、一方、強敵と闘っているときの彼を見よ！　なんと、みごとな、完全な姿であろう！　全身些かの隙もない逞しい緊張。律動的で、しかも一分のむだもない棒の使い方。疲れを知らぬ肉体が歡び・たけり・汗ばみ・跳ねている・その圧倒的な力量感。いかなる困難をも欣んで迎える強靱な精神力の横溢。それは、輝く太陽よりも、咲誇る向日葵よりも、鳴盛る蟬より



も、もつと打込んだ・裸身の・壮んな・没我的な・灼熱した美しさだ。あのみつともない猿の聞っている姿は。

一月ほど前、彼が翠雲山中で大いに牛魔王と戦ったときの姿は、いまだにはつきり眼底に残っている。感嘆のあまり、俺はそのときの戦闘経過を詳しく記録に取っておいたくらいだ。

……牛魔王一匹の香しゅうと変じ悠然として草を喰いいたり。悟空これを悟り虎に変じ駈け来たりて香しゅうを喰わんとす。牛魔王急に大豹と化して虎を撃たんと飛びかゐる。悟空これを見てから豹となり大豹目がけて襲いかかれば、牛魔王、さらばと黄獅に変じ霹靂のごとくに哮ってから豹を引裂かんとす。悟空このとき地上に転倒すと見えしが、ついに一匹の大象となる。鼻は長蛇の

ごどく牙きはは筍たかんに似たり。牛魔王堪えかねて本相あらを顕あらわし、たちま  
ち一匹はくぎゆうの大白牛はくぎゆうたり。頭こゆうは高峯こうほうのごどく眼まなこは電光でんこうのごどく双角じゆうかくは  
両座りやうざの鉄塔てつたに似たり。頭あたまより尾おしに至る長さながさ千余文せんよぶん、蹄ひづめより背上せうじやうに  
至る高さたかさ八百丈はちひゃうぢやう。大音だいおんに呼よびわつて曰いわく、なんじ悪あく猴こう今我いまわれをい  
かんとするや。悟空ごくうまた同どうじく本相ほんさうを顕あらわし、大鳴だいまつ一声いっせいするよと見  
るまに、身の高さたかさ一万丈いちまんぢやう、頭あたまは泰山たいざんに似て眼まなこは日月にちげつのごどく、口  
はあたかも血池ちやくちにひとし。奮然ふんぜん鉄棒てつぼうを揮ふるつて牛魔王ぎゆうまわうを打うつ。牛魔  
王角つうかくをもつてこれを受止うけどめめ、兩人半山にんげんはんざんの中なかにあつてさんざんに戦  
いければ、まことに山やまも崩くずれれ海うみも湧返わきまえり、天地てんちもこれがためために反はん  
覆ぶくするかと、すさまじかり。……

なんという壯觀さうくわんだつたらう！ 俺かれはホツと溜息ためいきを吐ついた。そばか

ら助太刀に出ようという気も起こらない。孫行者の負ける心配がな  
いからというのではなく、一幅の完全な名画の上にさらに拙い筆を  
加えるのを愧じる気持からである。

災厄は、悟空の火にとつて、油である。困難に出会うとき、彼の

全身は（精神も肉体も）焰々と燃上がる。逆に、平穩無事するとき、彼

はおかしいほど、しよげている。独楽のように、彼は、いつも全速

力で廻つていなければ、倒れてしまうのだ。困難な現実も、悟空に

とつては、一つの地図——目的地への最短の路がハッキリと太く線

を引かれた一つの地図として映るらしい。現実の事態の認識と同時

に、その中であつて自己の目的に到達すべき道が、実に明瞭に、彼

には見えるのだ。あるいは、その途以外は一切が見えない、といつ

たほうがほんとうかもしれぬ。闇夜の發光文字のごとくに、必要な途みちだけがハッキリ浮うかび上がり、他は一切見えないので。我々鈍根どんこんのものがいまだ茫然ぼうぜんとして考えも纏まとまらないうちに、悟空はもう行動を始める。目的への最短の道に向かつて歩き出しているのだ。人は、彼の武勇や腕力を云々うんぬんする。しかし、その驚くべき天才的な智慧ちについては案外知らないようである。彼の場合には、その思慮や判断があまりにも渾然こんぜんと、腕力行為の中に溶け込んでいるのだ。

俺おれは、悟空の文盲もんもうなことを知っている。かつて天上てんじやうで彌馬温ひつばおんなる馬方うまかたの役に任ぜられながら、彌馬温の字も知らなければ、役目の内容も知らないでいたほど、無学なことをよく知っている。しかし、俺は、悟空の（力と調和された）智慧ちと判断の高さを何ものにも優まして高く買う。悟空は教養が高いとさえ思うこともある。少なくとも

も、動物・植物・天文に関するかぎり、彼の知識は相当なものだ。彼は、たいていの動物なら一見してその性質、強さの程度、その主要な武器の特徴などを見抜いてしまふ。雑草についても、どれが薬草で、どれが毒草かを、実によく心得ている。そのくせ、その動物や植物の名称（世間一般に通用している名前）は、まるで知らないのだ。彼はまた、星によつて方角や時刻や季節を知るのを得意としているが、角宿かくしゆくという名も心宿しんしゆくという名も知りはしない。二十八宿しゆくの名をことごとくそらんじていながら実物ほんものを見分けることのできぬ俺と比べて、なんとという相異だらう！ 目に一丁字いっていじのないこの猴さるの前さきにいるときほど、文字による教養の衰れさを感じさせられることはない。

悟空ごくうの身体ていしの部分ぶぶん部分ぶぶんは——目も耳も口も脚も手も——みんな

つも嬉うれしくて堪たまらないらしい。生き生きとし、ピチピチしている。

ことに戦う段になると、それらの各部分かくぶぶんは歓喜くわんぎのあまり、花にむらがる夏の蜂はちのようにいつせいにワァーッと歓声くわんせいを挙げるのだ。悟空

の戦いぶりいくさぶりが、その真剣まけんな気魄きぱくにもかかわらず、どこか遊戯ゆうぎの趣を

備えているのは、このためであろうか。人はよく「死ぬ覚悟で」な

どというが、悟空という男はけっして死いぬ覚悟かくごなんかしない。どん

な危険けんけんに陥おとつた場合ばいでも、彼はただ、今自分のしている仕事しごと（妖怪ようかい

を退治たいぢするなり、三蔵法師さんざうほうしを救すくい出すなり）の成否せいひを憂うれえるだけで、自

分の生命せいめいのことなどは、てんで考えの中に浮うかんでこないののである。

太上老君たいじょうろうくんの八卦炉はっけいろ中に焼殺やうせつされかかったときも、銀角大王ぎんかくだいおうの泰山たいざん頂

頂ていの法ほふに遭あうて、泰山たいざん・須弥山しゆみせん・峨眉山あびざんの三山さんざんの下したに圧おさし潰つぶされそ

うになつたときも、彼はけっして自己の生命のために悲鳴を上げはしなかつた。最も苦しんだのは、小雷音寺しょうらいおんじの黄眉老仏こうびのために不思議な金鏡きんきようの下に閉じ込められたときである。推せども突けども金鏡は破れず、身を大きく変化させて突破ろうとしても、悟空の身が大きくなれば金鏡も伸びて大きくなり、身を縮めれば金鏡もまた縮まる始末で、どうにもしようがない。身の毛を抜いて錐きりと変じ、これで穴を穿うがとうとしても、金鏡には傷一つつかない。そのうちに、ものを蕩たかして水と化するこの器の力で、悟空の臀部てんぶのほうをそろそろ柔らかくなりはじめたが、それでも彼はただ妖怪に捕えられた師父ふの身の上ばかりを氣遣きづかっていたらしい。悟空には自分の運命に対する無限の自信があるのだ（自分ではその自信を意識していないらしいが。）やがて、天界から加勢に来た亢金竜こうきんりゆうがその鉄のごとき角をもつ

て満身の力をこめ、外から金鏡きんにようを突通した。角はみごとくに内まで突  
通ったが、この金鏡はあたかも人の肉のごとくに角に纏まといついて、  
少しの隙すきもない。風の洩もるほどの隙間すきまでもあれば、悟空は身をけし、  
粒と化して脱のれ出るのだが、それもできな。半ば臀部は溶けか  
りながら、苦心くんたん惨憺さんたんの末、ついに耳の中から金箍棒きんそぼうを取  
出して鋼鐵きり  
に変え、金竜の角の上に孔あなを穿うち、身を芥子粒けしつぶに変じてその孔あなに潜ひそ  
み、金竜に角を引抜かせたのである。ようやく助かったのちは、柔  
らかくなった己かのれの尻しりのことを忘れ、すぐさま師父しふの救い出しにかか  
るのだ。あとになつても、あるときは危なかつたなどとけつして言  
ったことがない。「危ない」とか「もうだめだ」とか、感じたことが  
ないのだらう。この男は、自分の寿命とか生命とかについて考えた  
こともないに違いない。彼の死ぬときは、ポクンと、自分でも知ら



ずに死んでいるだろう。その一瞬前までは澀刺と暴れ廻っているに  
違いない。まったく、この男の事業は、壮大という感じはしても、  
けっして悲壯な感じはしないのである。

猿は人真似をするというのに、これはまた、なんと人真似をしな  
い猿だろう！ 真似どころか、他人から押付けられた考えは、たと  
いそれが何千年の昔から万人に認められている考え方であつても、  
絶対に受付けないのだ。自分で充分に納得できなにかぎりは。

因襲も世間的名声もこの男の前にはなんの権威もない。

悟空の今一つの特色は、けっして過去を語らぬことである。とい  
うより、彼は、過去つたことは一切忘れてしまおうらしい。少なくとも

も個々の出来事は忘れてしまふのだ。その代わり、一つ一つの経験の与えた教訓はその都度、彼の血液の中に吸収され、ただちに彼の精神および肉体の一部と化してしまふ。いまさら、個々の出来事を一つ一つ記憶している必要はなくなるのである。彼が戦略上の同じ誤りをけつして二度と繰返さないのを見ても、これは判る。しかも彼はその教訓を、いつ、どんな苦い経験によつて得たのかは、すっかり忘れ果てている。無意識のうちには体験を完全に吸収する不思議な力をこの猴は有つているのだ。

ただし、彼にもけつして忘れることのできぬ怖ろしい体験がたつた一つあった。あるとき彼はそのときの恐ろしさを俺に向かつてしみじみと語つたことがある。それは、彼が始めて釈迦如来に知遇し

奉つたときのことだ。

そのころ、悟空は自分の力の限界を知らなかつた。彼が藕糸歩雲くつはの履くつを穿はき鎖子黄金さしの甲よろいを着きけ、東海竜王とうかいりゆうおうから奪うばつた一万三千五百斤きんの如意金箍棒にょいきんそうぼうを揮ふるつて闘たたかうところ、天上にも天下にもこれに敵かたする者がないのである。列仙れつせんの集あまる蟠桃会はんとうえを擾さわがし、その罰ばつとして閉しじ込こめられた八卦炉はつぱいろをも打破た破はつて飛と出ですや、天上界も狭せましとばかり荒あれ狂くるうた。群ぐんがる天兵てんべいを打倒たし薙たぎ倒たし、三十六員の雷将らいじやうを率ひきいた討手うちての大將祐聖真君ゆうせいしんくんを相手あいてに、靈霄殿りやうしやうてんの前に戦いくさうこと半日はんじつ余あり。そのときちようど、迦葉かしよう・阿難あなんの二尊者そんじやを連つれた釈迦牟尼しやくかに如来にょらいがそこを通とりかかり、悟空の前に立たち塞ふさがつて闘たたかいを停とめたもうた。悟空ぶつぜんが佛然ぶつぜんとして喰くつてかかる。如来にょらいが笑わらいながら言いう。「たいそう威張いばつているようだが、いっいたい、お前はいかなる道みちを修しゆしえたと

いふのか？」悟空いわ曰く「東勝神州とうとうらいこく傲来国おんらいこく華果山かこざんに石卵いしだまより生まれたるこの俺かれの力を知らぬとは、さてさて愚おろかなやつ。俺はすでに不老ふろう長生ちやうせいの法ぽうを修しゆし畢おわり、雲うんに乗り風かぜに御ごし一瞬いつしゆんに十万八千里じふばんせんりを行く者だ。」如来らいわ曰く、「大きなことを言うものではない。十万八千里はおろかなが掌てのひらに上つて、さて、その外へ飛出すことすらできまいに。」

「何を！」と腹はらを立てた悟空ごくうは、いきなり如来らいわの掌てのひらの上に跳おとり上あがった。「俺かれは通力つうりきによつて八十万里はちじゅうばんりを飛行ひぎやうするのに、なんじの掌てのひらの外そとに飛出とせまいとは何事なにごとだ！」言いひも終はわらずきん斗雲とううんに打乗うちまつてた

ちまち二、三十万里さんじゅうばんりも来たかと思おもわれるころ、赤く大いなる五本の柱はしらを見た。渠かれはこの柱はしらのもとに立寄たり、真中まんなかの一本いっぴんに、齊天大聖さいてんたいせい到此こゝ一遊いちゆうと墨すみくろくろと書きしるした。さてふたたび雲うんに乗のつて如来らいわの掌てのひらに飛歸とり、得々とくとくとくとして言いつた。「掌てのひらどころか、すでに三十万里さんじゅうばんりの遠とほ

くに飛行して、柱にしるしを留めてきたぞ！」「愚かな山猿よ！」と  
如来は笑った。「汝の通力がそもそも何事を成しうるといふのか？  
汝は先刻からわが掌の内を往返したにすぎぬではないか。嘘と思わ  
ば、この指を見るがよい。」悟空が異しんで、よくよく見れば、如来  
の右手の中指に、まだ墨痕も新しく、齐天大聖到此一遊と己の筆跡  
で書き付けてある。「これは？」と驚いて振仰ぐ如来の顔から、今ま  
での微笑が消えた。急に嚴肅に変わった如来の目が悟空をキツと見  
据えたまま、たちまち天をも隠すかと思われるほどの大きさに拡が  
って、悟空の上へのしかかってくる。悟空は総身の血が凍るような  
怖ろしさを覚え、慌てて掌の外へ跳び出そうとしたとたん、如来  
が手を翻して彼を取抑え、そのまま五指を化して五行山とし、悟空  
をその山の下に押込め、おん囁に吠めい叫の六字を金書して山頂に

貼りたもうた。世界が根柢こんていから覆り、今までの自分が自分でなくなつたような昏迷こんめいに、悟空はなおしばらく顛ふるえていた。事実、世界は彼にとつてそのとき以来一変したのである。爾後じご、餓ううるときは鉄丸を喰くらい、渴かわするときは銅汁を飲んで、岩窟がんくつの中に封じられたまま、贖罪しよくざいの期の充みちるのを待たねばならなかつた。悟空は、今までの極度の増上ぞうじょう慢まんから、一転して極度の自信のなさに墮おちた。彼は気が弱くなり、ときには苦しさのあまり、恥も外聞も構わずワアワアと大声なで哭ないた。五百年経たつて、天竺てんじくへの旅の途中にたまたま通りかかつた三蔵法師さんぞうほうしが五行山頂の呪符じゆふを剥はがして悟空を解き放つてくれたとき、彼はまたワアワアと哭ないた。今度のは嬉うれし涙であつた。悟空が三蔵さんぞうに随したがつてはるばる天竺までついて行こうというのも、ただこの嬉うれしさありがたさからである。実に純粹で、かつ、最も強烈な感

謝であつた。

さて、今にして思えば、釈迦牟尼しやかにむにによつて取抑えられたときの恐怖が、それまでの悟空の・途方もなく大きな（善悪以前の）存在に、一つの地上的制限を与えたもののようである。しかもなお、この猿の形をした大きな存在が地上の生活に役立つものとなるためには、五行山の重みの下に五百年間押し付けられ、小さく凝集ぎようしゆうする必要があつたのである。だが、凝固ぎようこして小さくなつた現在の悟空が、俺おれたちから見ると、なんと、段違いにすばらしく大きくみごとであることか！

三蔵法師は不思議な方である。実に弱い。驚くほど弱い。変化へんげの術ももとより知らぬ。途みちで妖怪ようかいに襲われれば、すぐに掴つかまつてしま

う。弱いというよりも、まるで自己防衛の本能がないのだ。この意  
氣地のない三蔵法師に、我々三人が齊しく惹かれているといふのは、  
いったいどういふわけだろう？（こんなことを考えるのは俺だけだ。

悟空も八戒もただなんとなく師父を敬愛しているだけなのだから。）私は  
思うに、我々は師父のあの弱さの中に見られるある悲劇的なものに  
惹かれるのではないか。これこそ、我々・妖怪からの成上がり者には  
絶対にないところのものなのだから。三蔵法師は、大きなものの  
中における自分の（あるいは人間の、あるいは生き物の）位置を——そ  
の衰れさと貴さとをハッキリ悟っておられる。しかし、その悲劇性  
に堪えてなお、正しく美しいものを勇敢に求めていられる。確かに  
これだ、我々になくて師に在るものは。なるほど、我々は師よりも  
腕力がある。多少の変化の術も心得ている。しかし、いったん己の



位置の悲劇性を悟つたが最後、金輪際、正しく美しい生活を真面目に続けていくことができないに違いない。あの弱い師父の中に、この貴い強さには、まったく驚嘆のほかはない。内なる貴さが外の弱さに包まれているところに、師父の魅力があるのだと、俺は考へる。もつとも、あの不埒な八戒の解釈によれば、俺たちの——少なくとも悟空の師父に対する敬愛の中には、多分に男色的要素が含まれているというのだが。

まったく、悟空のあの実行的な天才に比べて、三蔵法師は、なんと実務的には鈍物であることか！ だが、これは二人の生きることの目的が違ふのだから問題にはならぬ。外面的な困難にぶつかったとき、師父は、それを切抜ける途を外に求めずして、内に求める。つまり自分の心をそれに耐えうるように構えるのである。いや、そ

のとき慌あわてて構かまえずとも、外的な事故によつて内なるものが動揺を  
受けないように、平生へいぜいから構かまえができてしまつてゐる。いつどこで  
窮きゆう死ししてもなお幸福きふでありうる心を、師はずでに作り上げておられ  
る。だから、外に途を求めする必要がないのだ。我々から見ると危あぶな  
くてしかたのない肉体上の無防禦むぼうぎよも、つまりは、師の精神にとつて  
別にたいした影響はないのである。悟空のほうは、見た眼にはすこ  
ぶる鮮やかだが、しかし彼の天才をもつてしてもなお打開くわいできな  
ような事態が世には存在するかも知れぬ。しかし、師の場合にはそ  
の心配はない。師にとつては、何も打開する必要がないのだから。  
悟空には、嚇怒かくどはあつても苦惱くなんはない。歡喜くわんぎはあつても憂愁ゆうしゅうはな  
い。彼が單純たんじゆんにこの生を肯定こうていできるのになんの不思議もない。三蔵  
法師の場合はどうか？ ああ、あの病身ふせと、禦まぐことを知らない弱さと、

常に妖怪ようかいどもの迫害を受けている日々をもつてして、なお師父しよは  
悦たのしげに生うべなを肯うべなられる。これはたいしたことではないか！

おかしいことに、悟空は、師の自分より優まつているこの点を理解  
してはいない。ただなんとなく師父から離れられないのだと思つてい  
る。機嫌きげんの悪いときには、自分が三蔵法師さんざうに随したがっているのは、ただ  
緊箍咒きんそくじゆ（悟空の頭に箍はめられている金の輪わで、悟空が三蔵法師の命に従  
わぬときにはこの輪が肉に喰くい入つて彼の頭を緊しめ付け、堪たえがたい痛み  
を起おこすのだ。）のためだ、などと考えたりしている。そして「世話  
の焼ける先生だ。」などとブツブツ言いながら、妖怪に捕えられた師  
父を救い出しに行くのだ。「あぶなくて見ちやいられない。どうして  
先生はあんなだるうなああ！」と言うとき、悟空はそれを弱きもの  
への憐愍れんぴんだと自惚うぬぼれているらしいが、実は、悟空の師に対する気持

の中に、生き物のすべてがもつ・優者に対する本能的な畏敬<sup>いけい</sup>、美と貴さへの憧憬<sup>どうけい</sup>がたぶんに加わっていることを、彼はみずから知らぬのである。

もつとおかしいのは、師父自身が、自分の悟空に対する優越をぞ存じないことだ。妖怪の手から救い出されるたびごとに、師は涙を流して悟空に感謝される。「お前が助けてくれなかつたら、わしの生命はなかつたらうに！」と。だが、実際は、どんな妖怪に喰<sup>く</sup>われようど、師の生命は死にはせぬのだ。

二人とも自分たちの真の関係を知らずに、互いに敬愛し合<sup>あ</sup>って（もちろん、ときにはちよつとしたいさかいはあるにしても）いるのは、おもしろい眺めである。およそ対蹠<sup>たいせき</sup>的なこの二人の間に、しかし、たった一つ共通点があることに、俺<sup>おれ</sup>は気がついた。それは、二人がそ

の生き方において、ともに、所与しよよを必然と考え、必然を完全と感じていることだ。さらには、その必然を自由と看做みなしていることだ。金剛石こんごうせきと炭とは同じ物質からでき上がっているのだそうだが、その金剛石と炭よりもつと違い方のはなはだしいこの二人の生き方が、ともにこうした現実の受取り方の上に立っているのはおもしろい。そして、この「必然と自由の等置とうち」こそ、彼らが天才であることの徴しるしでなくてなんであるか？

悟空ごくう、八戒はっかい、俺おれと我々三人は、まったくおもしろいそれぞれに違っている。日が暮れて宿がなく、路傍の廃寺に泊まることに相談が一決するときでも、三人はそれぞれ違った考えのもとに一致しているのである。悟空はかかる廃寺こそ究竟くつきやうの妖怪退治ようかいたいぢの場所だと

して、進んで選ぶのだ。八戒は、いまさらよそを尋ねるのも徳劫ちやくきやくだし、早く家にはいつて食事もしたいし、眠くもあるし、というのだし、俺の場合は、「どうせこのへんは邪悪な妖精ようせいに満ちているのだらう。どこへ行つたつて災難に遭あうのだとすれば、ここを災難の場所として選んでもいいではないか」と考えるのだ。生きものが三人寄れば、皆このように違うものであるか？　生きものの生き方ほどおもしろいものはない。

孫行者そんぎやうじやの華はなやかさに圧倒されて、すつかり影の薄らいだ感じだが、猪悟能ちよごのうはつぱいもまた特色のある男には違いない。とにかく、この豚は恐ろしくこの生を、この世を愛してゐる。嗅覚きゆうかく・味覚・触覚のすべてを挙げて、この世に執しゆうしてゐる。あるとき八戒はつぱいが俺われに言った

ことがある。「我々が天竺へ行くのはなんのためだ？ 善業を修して  
来世に極楽に生まれんがためだろうか？ ところで、その極楽とは  
どんなところだろう。蓮の葉の上に乗つかつてたゆらゆら揺れて  
いるだけではしようがないじゃないか。極楽にも、あの湯気の立つ  
羹をフウフウ吹きながら吸う楽しみや、こりこり皮の焦げた香ばし  
い焼肉を頬張る楽しみがあるのだろうか？ そうでなくて、話に聞  
く仙人のようになだ霞を吸って生きていくだけだったら、ああ、厭  
だ、厭だ。そんな極楽なんか、まっぴらだ！ たとえ、辛いことが  
あつても、またそれを忘れさせてくれる・堪えられぬ怡しさのある  
この世がいちばんいいよ。少なくとも俺にはね。」そう言つてから八  
戒は、自分がこの世で楽しいと思ふ事柄を一つ一つ数え立てた。夏  
の木蔭の午睡。溪流の水浴。月夜の吹笛。春暁の朝寐。冬夜の炉辺

歡談。……なんと愉たのしげに、また、なんと数多くの項目を彼は数え立てたことだろう！ ことに、若い女人の肉体の美しさと、四季それぞれの食物の味に言い及んだとき、彼の言葉はいつまで経たつても尽きぬもののように思われた。俺はたまげてしまった。この世にかくも多くの恰たのしきことがあり、それをまた、かくも余すところなく味わっているやつがいようなどとは、考えもしなかつたからである。なるほど、楽たのしむにも才能の要いるものだと俺は気がつき、爾じ来らい、この豚を輕蔑けいべつすることを止やめた。だが、八戒はつかいと語ることが繁しげくなるにつれ、最近妙なことに気がついてきた。それは、八戒の享樂主義の底に、ときどき、妙に不気味なものの影がちらりと覗のぞくことだ。「師父しふに対する尊敬と、孫行者そんぎやうじやへの畏怖いふとがなかつたら、俺はとつづくにこんな辛つらい旅つなんが止やめてしまつていたらう。」などと口では言



つてゐる癖に、実際はその享樂家的な外貌の下に戦々競々として薄氷を履むような思ひの潜んでゐることを、俺は確かに見抜いたのだ。

いわば、天竺へのこの旅が、あの豚にとつても（俺にとつても同様）、

幻滅と絶望との果てに、最後に縋り付いたただ一筋の糸に違ひないと思われる節が確かにあるのだ。だが、今は八戒の享樂主義の秘密

への考察に耽つてゐるわけにはいかぬ。とにかく、今のところ、俺

は孫行者からあらゆるものを学び取らねばならぬのだ。他のことを

顧みている暇はない。三蔵法師の智慧や八戒の生き方は、孫行者を

卒業してからのことだ。まだまだ、俺は悟空からほとんど何ものを

も学び取つておりはせぬ。流沙河の水を出てから、いったいどれほ

ど進歩したか？ 依然たる呉下の旧阿蒙ではないのか。この旅行に

おける俺の役割にしたつて、そうだ。平穩無事のとくに悟空の行き

すぎを引き留め、毎日の八戒の怠惰を戒めること。それだけではないか。何も積極的な役割がないのだ。俺みたいな者は、いつでもこの世に生まれても、結局は、調節者、忠告者、観測者にとどまるのだらうか。けっして行動者にはなれないのだらうか？

孫行者の行動を見るにつけ、俺は考えずにはいられない。「燃え盛る火は、みずからの燃えていることを知るまい。自分は燃えているな、などと考えているうちは、まだほんとうに燃えていないのだ。」

と。悟空の闊達無碍の働きを見ながら俺はいつも思う。「自由な行為とは、どうしてもそれをせぜにはいられないものが内に熟してきて、おのずと外に現われる行為の謂だ。」と。ところで、俺はそれを思うだけなのだ。まだ一歩でも悟空についていけないのだ。学ぼう、学ぼうと思いつながら、悟空の雰囲気を持つ術達いの大きさに、また、

悟空的なるものの肌合はたあいの粗あらさに、恐れをなして近づけないのだ。  
実際、正直なところを言えば、悟空は、どう考えてもあまり有難ありがたい  
朋輩ほうばいとは言えない。人の気持に思い遣りやがなく、ただもう頭からガ  
ミガミ怒鳴り付ける。自己の能力を標準にして他人ひとにもそれを要求  
し、それができないからとて怒りかこつけるのだから堪たらない。彼は自  
分の才能の非凡さについての自覚がないのだとも言える。彼が意地  
悪あくないことだけは、確かに俺たちにもよく解わかる。ただ彼には弱者  
の能力の程度がうままく吞み込のみ込めず、したがって、弱者の狐疑こぎ・躊躇ちゆうちゆう・  
不安などにいつこう同情がないので、つい、あまりのじれれつたさに  
疔癢かんしやくを起こすのだ。俺たちの無能力が彼を怒らせさせしなれば、  
彼は実に人の善い無邪気な子供のような男だ。八戒はいつも寐ねすご  
したり怠なまけたり化け損そこなつたりして、怒られどおしてある。俺が比較

的彼を怒らせないのは、今まで彼と一定の距離を保っていて彼の前にあまりボクを出さないようにしていたからだ。こんなことではいつまで経つても学べるわけがない。もつと悟空に近づき、いかに彼の荒さが神経にこたえようと、どんどん叱られ殴られ罵られ、こちらからも罵り返して、身をもつてあの猿からすべてを学び取らねばならぬ。遠方から眺めて感嘆しているだけではなんにもならない。

夜。俺は独り目覚めている。

今夜は宿が見つみならず、山蔭の溪谷の大樹の下に草を藉いて、四人がごろ寝をしている。一人おいて向こうに寝ているはずの悟空の軒が山谷に倒すばかりで、そのたびに頭上の木の葉の露がパラパラと落ちてくる。夏とはいえ山の夜気はさすがにうすら寒い。もう

真夜中は過ぎたに違いない。俺は先刻から仰向けに寐ころんだまま、木の葉の隙あいたから覗のぞく星どもを見上げている。寂しい。何かひどく寂しい。自分があの淋さびしい星の上にたった独りて立つて、まつ暗な・冷たい・なんにもない世界の夜を眺めているような気がする。星というやつは、以前から、永遠だの無限だのといふことを考えさせるので、どうも苦手にがてだ。それでも、仰向あかむいているものだから、いやでも星を見ないわけにいかない。青白い大きな星のそばに、紅あかい小さな星がある。そのずつと下の方に、やや黄色味を帯びた暖かそうな星があるのだが、それは風が吹いて葉が揺れるたびに、見えたり隠れたりする。流れ星が尾を曳ひいて、消える。なぜか知らないが、そのときふと俺は、三蔵法師さんぞうほうしの澄んだ寂しげな眼を思い出した。常に遠くを見つめているような・何物かに対する憫あはれみをいつも湛たえて

いるような眼である。それが何に對する憫れみなのか、平生へいぜいはいつ  
こう見当が付かなくていたが、今、ひよいと、判わかつたような気がし  
た。師父しふはいつも永遠を見ている。それから、その永遠と對比  
された地上のなべてのもの、の運命さだめをもはつきりと見ておられる。い  
つかは来る滅亡ほろびの前に、それでも可憐かれんに花開こうとする歡智あちえや愛情なさけ  
や、そうした数々の善きものの上に、師父は絶えず凝手じつと慙あはれみの  
眼差まなざしを注いでおられるのではなからうか。星を見ていると、なんだ  
かそんな気がしてきた。俺は起上がつて、隣に寐ねておられる師父の  
顔を覗のぞき込む。しばらくその安らかな寝顔を見、静かな寝息を聞いて  
いるうちに、俺は、心の奥に何かポツと点火されたようなほの  
温かさを感じてきた。



使用書体 欣喜堂 K〇ひさなが志安

組版 島崎肇則

公開 二〇一九年七月三一日

底本 「李陵・山月記・弟子・名人伝」角川文庫、角川書店

一九六八（昭和四三）年九月一〇日改版初版発行

一九八三（昭和五八）年九月三〇日改版二四版発行

入力 佐野良二

校正 かとうかおり

一九九九年二月九日公開

二〇一一年二月二七日修正

青空文庫作成ファイル

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.iqz.com/jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。